南阿蘇における温泉の変遷に関する研究

熊本大学工学部　学生会員　○松本　佳子
熊本大学　正会員　星野　裕司
熊本大学　正会員　増山　晃太

1. はじめに

1-1. 背景と目的

平成 28 年 4 月 14 日及び 16 日に発生した熊本地震は,熊本県を代表とする観光名所である熊本城を始め,あらゆる観光地に大きな被害を与えた．特に観光地として有名である南阿蘇村は，阿蘇大橋崩落や通行止めなど今もなお厳しい状況にある．南阿蘇村は阿蘇山の恩恵を受け温泉が有名であり，昔から自然の豊かな地域であった．温泉は湯治として古くから日本人に親しまれており,温泉旅館として観光にも活用されてきた．近年では地熱発電の開発や湯～園地計画などの新たな温泉の利用方法が出現し，温泉地への関心はますます高まっている．しかし現在，全国の延べ宿泊利用人員は増加傾向にある一方で，宿泊施設および収容定員は年々減少している[1]．また日本は自然災害大国であり，火山と関係の深い温泉は自然災害とは切っても切り離せないものである．そこで本研究では，火山性の温泉地を対象とし，温泉の歴史を辿ることで今現在見落としているかも知れない新たな価値を見出し，今後の温泉の在り方に向けた基礎的資料の作成を目的とする．

1-2. 研究対象と方法

本研究では，現在温泉復興に取り組んでいる熊本県阿蘇郡南阿蘇村に存在または存在していた温泉を研究対象とする．南阿蘇村は平成 17 年 2 月 13 日に旧白水村･長陽村･久木野村が合併して誕生した地域である．

文献調査を基本とし，これまでの南阿蘇の温泉の変遷を辿り，周辺との関係性を地図や表を用いて整理した上で，どのような特徴があるのかを抽出し，新たな温泉の価値について考察する．

2. 南阿蘇の温泉の概要

まず南阿蘇村の温泉に関する出来事について調査した結果，災害だけでなく交通とも深く関係していることが分かった．そのため「温泉（赤）・災害（緑）・交通（青）・その他（城）」に表を分類し，温泉の変遷について整理した（表-1）[2)3)4)5)]．次に温泉の変遷を視覚化するため明治初期と平成の地図を作成した(図-1, 図-2）[6)]．年表および 2 枚の地図を分析した結果，温泉街というものは存在せずそれぞれの温泉が点在していること，昔から存在している温泉が「湯の谷・垂玉・地獄・栃木・戸下」の 5 つであり，この順番で発見されたことが分かった．以上のことより，5 つの温泉についてより深く変遷を辿ることで，南阿蘇村の温泉の大きな特徴が発見できると考えられる．

表-1. 南阿蘇の温泉年表（筆者作成）

時代	西暦	年号		月	日	出来事	
旧石器	約1万年前					地獄温泉周辺で大きな水蒸気爆発	
縄文	約4500年前					地獄温泉周辺で大きな水蒸気爆発	
鎌倉 南北朝 室町	1301 ｜ 1400					湯の谷温泉　存在	
南北朝	1376	永和/天授	2			湯の谷温泉	・僧たちの保養の場などとして使用 （温泉について文献に出てくる最初の事）
安土桃山	1573 ｜ 1592	天正年間				垂玉温泉	金龍山垂玉寺という観音堂があったと伝えられており そのころから利用されていたと考えられる
江戸	1603 ｜ 1868					地獄温泉について	・発見時期は不明だが江戸時代頃から湯治場として栄えた ・竿(カラムシ)を地獄温泉の蒸気で蒸した
						湯の谷温泉について	・運上金を湯の谷温泉が肩代わりして銭湯運上銭から 払ったのを寺志に認めて貰おうとした ・本陣、阿蘇社家の間、土席の間などが設けられており 身分によって入湯の場などに違いがあったようだ ・江戸時代が終わるころ温泉の規模が拡大され、 湯坪が3,4箇所になった
江戸	1664	寛文	4			栃木温泉　本温泉発見	・細川藩士が狩りの途中、手負いの猪が白川の渓流で 傷を癒しているのを見つけてからだと伝えられている ・高月權之助の発見によるという
	1731	享保	16			垂玉温泉　山崩れのため潰れる	
	1744 ｜ 1747	寛保 延享	4 元年 ｜ 4			垂玉温泉　破壊	大洪水により、山崩れが発生し湯室が埋まった
	1750	寛延	3			湯の谷温泉　発見	長野熊之丈が発見
	1757	宝暦	7			栃木温泉　営業	藩庁の管理下にあり、藩の役人で温泉を管理する 「湯横目役」が配置されていた。 「引高」(課税対象から削り引く高) が 「抬石」(十石) になっていることから 湯銭を徴収して利益を得ていたことが想定される
	1760		10	12		栃木温泉　新たに湯口を作るように指示される	湯口所では老人婦人共思うように入湯できぬため 今までの湯坪に湯口ニカ所作るよう藩庁が指示した
	1768		5	6		湯の谷に温泉仕立てが命ぜられる	椎方九郎左衛門と田添源次郎の企画によって
	1769	明和	6	1		湯の谷温泉　入湯可能	
				6		湯の谷温泉　湯小屋完成	・六畳敷二間ずつのもの2、三畳敷のもの4室 ・新規取り立ての処であるため特例に藩源本手一本 （酒の量で十石くらいの販売）を許す
	1786	天明	6	10		垂玉温泉　再興願を出す	布田手永川後田村が提出
	1806		3	12		垂玉温泉　再興	東下田村居住野田源八郎によって
	1808	文化	5			地獄温泉　入湯の掟	・再興のために設が出された 武士、僧侶、山伏などに限られており、町人の入湯は 認められていなかった
	1816		13	6		湯の谷大変	水蒸気爆発
	1832	天保	3			地獄温泉　宿　創設	岩本徳三によって創設された
	1858	安政	5			湯の谷温泉での水蒸気爆発	
	1865	慶応	元年	4		垂玉温泉　熊本の藩主の親族と家来がやって来る	垂玉の温泉とそこへ通ずる道路などの補修工事が行われた
明治	1871	明治	4	7		奥湯豊県　断行	
	1881		14	3	20	湯の谷温泉での水蒸気爆発	
				4	18	湯の谷でガス爆発発生	宿舎や入畜に被害なし
	1882 ｜ 1883		15-16			戸下温泉　完成	赤峯正起・長野一誠・片島七五らの尽力により 栃木温泉の泉源を引いて浴場をつくる
	1888		21			栃木温泉　本温泉　経営者交代	高月氏から小山雄太郎に経営が受け継がれた
	1895		28	3	7	栃木温泉　新温泉発見	新香館と呼ばれる旅館があった 荒牧輝親氏によって見出された 積翠館という旅館があった
	1899		32			市制町村制の施行	長陽村・白水村・久木野村　誕生
				5		垂玉温泉　修学旅行先となる	久部実業補修学校職員生徒30名余り
				8	10	暴風雨（台風？）	戸下温泉近くにあった眼鏡橋を架けるための 工事用下橋ができたばかりに流出した
	1900		33			垂玉温泉　旅館が新築される	山口廣記によって新しく建設された 旧長陽村喜多に通ずる車道も建設された 基礎の石垣に約2年、工費5000円を投じた 建物にも8000円を費やした
	1901		34			垂玉温泉　修学旅行先となる	御船町の上益城高等小学校の生徒150人が宿泊
大正		大正				地獄温泉　清風荘について	大正末年野田三蔵が賃収して入浴施設を整備 これを野田恒夫が継承して清風荘と称した
	1914		3	6	21	豊肥線一肥後大津　開通	熊本方面から長陽村への温泉客増加
	1917		6	5	8	軽便鉄道宮地線全線　開通	旧長陽村の玉温泉への入浴客の増加をもたらした
	1918		7			湯の谷温泉　広荘なホテルが建てられる	長野惟継によって
	1925		12	4		栃木温泉　本湯　四階建　建設	約10万金を投じて新館を落成
	1924		13			長陽村へ自動車導入	温泉地に入浴客を運ぶ手段として乗合バスが登場
昭和		昭和				栃木温泉　新湯　家館を新築	浴室を改造し巧に白川河岸の壁座を利用した屋舎を設けた
	1928		3			高森線　開通	長陽駅・栃木温泉に近く又阿蘇登山と 　　鉢掃りの瀧の探勝にも便利が良い 下田駅・垂玉温泉・地獄温泉への近道 駅前には食堂や温泉の案内所など作られ ちょっとした商店街が形成されて賑わった
	1929		4			修学旅行	色見・高森、白水、久木野、長陽の玉小学校連合および 尋常科の5年生から高等科の2年生までの 別府温泉への修学旅行が行われた
	1934		9	12	4	阿蘇国立公園指定	
	1938		13			湯の谷温泉	大正7年に建設したホテルを熊本県が買収
	1939		14	7	22	阿蘇観光ホテル完成	
						和風の蘇峰館を新築	
						湯の谷温泉	温泉を採取するためのボーリングが数本掘られた その内の1本は2, 30メートルほどの高さに積き上げる 間欠泉となった その後降雨や理由は明らかではないが 間欠泉の噴出は止まっている
	1944		19			観光ホテル・蘇峰館　九州産交会社の併合することなった	
	1953		28	6	26	六・二六水害	地獄・垂玉・栃木・戸下・湯の谷の5つの温泉地は どこも壊滅的な被害を被った
					28	地獄温泉　送湯パイプ修復	
				7	3	栃木温泉　営業再開	災害調査団一行を客として迎え入れた
	1954		29	4		垂玉温泉　再興	
	1956		31			長陽村　再編成	当時の菊池郡瀬田村から立野地区を分村編入
	1958		33			栃木温泉　復旧完了	
	1976		51			湯の谷温泉　新しい泉源開発	湯量不足を補う
	1985		60			戸下温泉なくなる	立野ダム建設工事のため、春に姿を消した
	1986		61			阿蘇国立公園　改名　阿蘇くじゅう国立公園	
	1987		62			白水温泉	
平成	1990	平成	2			久木野温泉センター木の香湯	
	1993		5			温泉センターヴィナス	
						南阿蘇久木野温泉四季の森	
						阿蘇下田城ふれあい温泉駅	
	1995		7			阿蘇白水温泉瑠璃	
						阿蘇ファームランド完成	
	2005		17	2	13	南阿蘇村誕生	阿蘇郡長陽村・白水村・久木野村が合併
	2008		20	2	29	国民宿舎「南阿蘇」閉館	
				5	30	株式会社セルモ　企業進出	温泉付宿泊施設整備を目的に
				8	30	阿蘇白水温泉・瑠璃　入館者300万人達成	
	2016		28	4	14 16	熊本地震　発生	旧長陽村の玉温泉は2017年現在も営業停止中

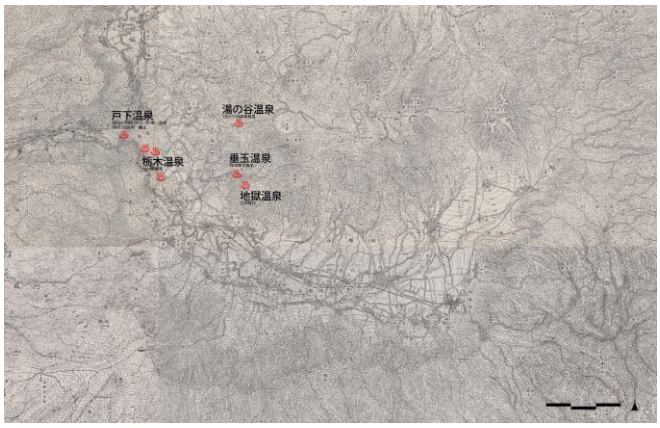

図-1　明治初期の南阿蘇周辺地図（筆者作成）

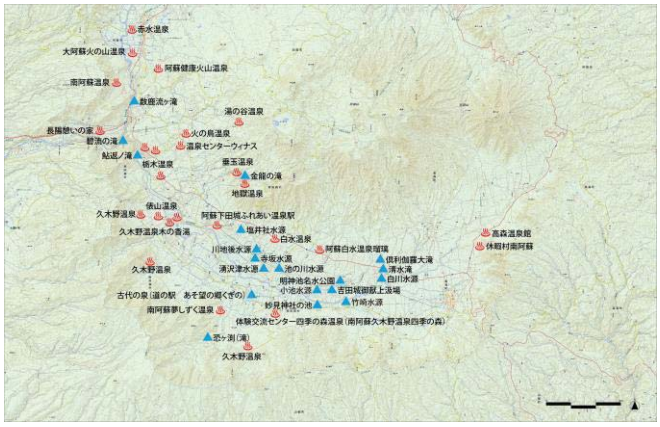

図-2　平成 29 年の南阿蘇周辺地図（筆者作成）

3.　5 つの各温泉の変遷と特徴について

3-1.　湯の谷温泉

鎌倉時代の頃から存在していたとされ，永和 2 年には僧たちの保養の場などとして使用されていた．この出来事が南阿蘇の温泉の文献における最初の記述である．江戸時代は本陣・阿蘇社家の間・士席の間などが設けられており，身分によって入湯の場などに違いがあったとされる. また文化 13 年 6 月には水蒸気爆発である湯の谷大変が発生し，現在までに計 7 回の災害が発生している．

3-2.　垂玉温泉

天正年間に金龍山垂玉寺という観音堂があったと伝えられており，そのころから利用されていたと考えられる．享保から寛保の間に 2 度山崩れが発生し，その後現在までに 3 回災害が発生している．明治には 2 度修学旅行先に指定され, 多くの人が垂玉温泉を訪れた．登山帰りのお客も多く，トレッキングルートの一部としても利用されていた．

3-3.　地獄温泉

発見時期は不明であるが，江戸時代頃から湯治場として栄えた．文化 5 年には入湯の掟が出され，入湯は武士・僧侶・山伏などに限られており，町人は認められていなかった．

3-4.　栃木温泉

寛文 4 年に細川藩士が狩りの途中に，手負いの猪が白川の渓流で傷を癒しているのを見つけたことが温泉の発見だと伝えられている．しかし，高月權之助の発見によるという説もある．宝暦 7 年には藩庁の管理下にあり，藩の役人で温泉を管理し営業していた．また宝暦 10 年には老人婦人共に, 思うように入湯できないため新たに湯口を造るように藩庁に指示された．明治 28 年 3 月 7 日に新温泉が発見された．

3-5.　戸下温泉

明治 15 年～16 年に赤峯正起らの尽力により栃木温泉の泉源を引いて浴場をつくった．何度も災害に見舞われその都度復興してきたが，立野ダム建設工事のため昭和 60 年に姿を消した．

4.　5 つの温泉の共通の特徴について

すべての温泉に共通している特徴は，いつの時代もよく災害が発生し，その都度素早く復旧・復興していることである．さらに，インフラが整備されることで温泉客が増加し，温泉客を運ぶ手段として初めて自動車が導入された．また，修学旅行先や観光場所になったり登山の休憩所になったりあらゆる人が訪れる場所であった．

5.　おわりに

本研究では主に南阿蘇村の 5 つの温泉について変遷を辿った結果，温泉そのものも大変重要な資源であるが，レクリエーションやインフラなど温泉とその他資源との関わりが深いことが発見された．今後の復興にあたって，今回発見された情報等を新たな価値として考え，位置づけすることが重要であると考える．今後の展望としては，温泉の価値について深く考察し，温泉の新たな価値を見出していきたい．

【参考文献】

1)環境省：温泉利用状況，2015
2)中村安孝：阿蘇郡誌，1973
3)本田秀行：阿蘇　南郷谷覚書，1984
4)長陽村：長陽村史，2004
5)岩本政教：熊本の温泉と休養地，1985
6)南阿蘇村：村勢要覧，2014